

平成 18 年度 博士課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

筋萎縮性側索硬化症在宅人工呼吸療養者の社会参加としての外出を促進する
要因の分析

学位の種類: 博士 (保健科学)

保健科学研究科 保健科学専攻 フロンティアヘルスサイエンス 分野

学籍番号 046518

氏名: 中山 優季

(指導教員名: 鈴木 隆雄 教授)

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A 4 版) に収めること

【目的】在宅人工呼吸療養者の自由な社会参加を促進する支援システムの構築に資することを目的に、筋萎縮性側索硬化症 (以下、ALS) 在宅人工呼吸療法 (以下、HMV) 療養者の外出状況を調査し、社会参加としての外出を促進する要因を検討した。

【方法】A 社の機器を使用し、調査に同意した ALSHMV 者を対象に、外出状況と外出を可能とする条件に関する自記式の質問紙による郵送調査を行った。外出状況の分析から、社会参加としての外出実施ありの者 (以下、社会参加群) と、なしの者 (以下、非社会参加群) に群別し、調査項目を χ^2 検定、t 検定、多重ロジスティック回帰分析を用いて比較し、社会参加としての外出の実施に影響を与える要因について分析した。

【結果】分析対象とした気管切開式 HMV 者 289 名のうち、外出経験者は、228 名 (78.9%) で、調査時の外出頻度は、「2~3 ヶ月に 1 回」以上が 122 名 (228 名中、53.5%)、「半年に 1 回」以下が 106 名 (同 46.5%) であった。外出希望「あり」は、162 名 (全 289 名中、56.1%) で、うち 70 名 (162 名中、43.2%) は、「半年に 1 回」以下あるいは未経験であった。外出経験者の外出状況 (希望、程度、目的) を分析した結果、外出頻度が「2~3 ヶ月に 1 回」以上の者が、社会参加としての外出を経験している割合が高く、この 122 名 (全 289 名中 42.2%) を社会参加群、これ以外 (頻度が半年に一回以下、および未経験者) 167 名 (同 57.8%) を非社会参加群とした。両群の単変量解析では、年齢、意思伝達装置の利用割合、療養者の外出希望、主観的 QOL 得点、外出に対する認識 (8 項目)、主介護者の療養者との外出希望、介護協力者、介護負担得点、外出に必要な機器の所有率 (3 項目) と操作方法の不安 (5 項目)、自宅内障害、外出促進に必要な条件 (3 項目)、合計 27 項目に有意差が認められた ($p < 0.05$)。次いでこれら 27 項目を説明変数として、多重ロジスティック回帰分析を行った結果、外出実施に独立して影響を与える要因は、外部バッテリーの所有、療養者の外出希望、意思伝達装置の利用、外出先のバリアフリー、訪問看護支援の 5 項目であった。

【考察】ALSHMV 者の外出経験者の割合は 78.9% と高い傾向を示したが、社会参加群は 122 名 (42.2%) に過ぎず、「外出希望者」162 名中 70 名 (43.2%) は、社会参加としての外出が実施できていないことが明らかとなり、社会参加を促進する必要性が示唆された。社会参加としての外出の実施に影響する独立した要因が明らかとなり、促進するための支援策として、必要物品の装備、バリアフリーの推進や自宅内障害の除去等外出環境の整備、外出希望を高めるための支援、意思伝達手段の確保、訪問看護支援の重要性が示唆された。

【結論】289 名の ALSHMV 者の外出状況を分析した結果、社会参加としての外出の実施者は 122 名 (42.2%) であり、社会参加群と非社会参加群の比較から、社会参加 (外出) の実施に影響を与える要因として、外部バッテリーの所有、外出希望、意思伝達装置の利用、外出先のバリアフリー、訪問看護支援があげられ、これらの条件整備の重要性が示唆された。